あるむぜお77

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO. 77　2006年9月20日

1968年（昭和43）撮影　旧人見村（若松町）の草葺民家、右には洗濯物も写る。（写真No. 734-19a）

目次

1-2 宮本常一の見た府中 その6
失われゆく草葺民家を撮る

3 展示会案内 テーマ展
武蔵国―かたちと境界―

4-5 ノート　江戸時代、町田から府中に運ばれた瓦

6 収蔵庫のニューフェース

7 最近の発掘調査
中世武士の居館跡か？大規模な区画溝発見

8 展示室リニューアルトピックス　②

ここ四、五年、私は府中市と青梅市の民家をたくさん訪れる機会を持った。その間にも草葺の民家はどんどん消えていった。私が府中市の民家を見てあるいた頃には二四、五戸のこっていたが、いまその半分に減っているのではないかと思う。一つには屋根がいたんでも葺きかえる茅がなくなったし、昔の家は使い勝手がわるく、どうしても新しい家に住みたいという気持は皆持っている。周囲にあたらしい家がぐんぐんふえていくのだから。

宮本常一「古い民家」
（『私の日本地図　武蔵野・青梅』 1971年）より

表紙：宮本常一の見た府中⑥　失われゆく草葺民家を撮る

佐藤智敬

民俗学者宮本常一が府中市内の風景を1,000枚以上残した理由のひとつには、市内在住だったことに加え、市の文化財専門委員会の議長だったこと、そして『府中市史』下巻の民俗編を編纂する仕事を引受けていたことがあげられます。建築物や民具、府中市立郷土館（府中市郷土の森博物館の前身）内の展示品などをたくさん撮影しているため枚数も多くなっているのです。

調査の対象には、民家もありました。『府中市の現存草葺民家調査集』（1969年刊行）には多くの草葺民家の写真・図面が掲載されています。この調査集は1969年（昭和44）、宮本と、彼が教鞭をとっていた武蔵野美術大学の生活文化研究会が中心となり編集をすすめ、刊行されたものです。

さて、表紙の写真は40年程前の旧人見村（若松町）に建っていた草葺民家です。掲載はされていませんが、調査集発行の一年前の撮影であることから、草葺民家調査の一環で撮影されたものだと思われます。屋根はもちろんですが、建物の右側に干されている洗濯物や風呂用の煙突なども写り、まだ生活のなかに草葺き民家がある様子が表現されているように思います。

日本全国でトタン屋根すらも珍しくなり、瓦ぶきやコンクリート屋根があたりまえの昨今、ここに写っているような屋根の家は民家園や民芸調の店舗などを除けばほとんど残っていません。

瓦やコンクリートではなく、茅やワラなどで屋根を葺き、維持し続けるのには相当な苦労が必要です。20年に一度は葺き替える必要があります。そのためには材料を確保しなくてはなりません。ということは広い茅野か田畑を必要とします。さらに葺き替え時には屋根葺き職人や、10人以上の協力も必要でした。また、葺き替えても雨漏りしたり、カラスにいたずらされて壊されることもあります。それゆえ草葺き屋根は丈夫なトタン屋根になったり、増改築等を機会にどんどん姿を消していったのです。

こうして各地から失われてゆく草葺民家について、宮本は、どうにかして一棟でもその姿を保存できないかと画策していました。そして貴重な民家を移築復元する道をさぐり、府中ではその希望が実現したのです。

下はそのひとつ、芝間（南町）の越智家住宅で、郷土の森博物館に移築される前の写真です。これは『私の日本地図　武蔵野・青梅』でも「この家は古い　文化財として保存したいが」というキャプションとともに次のように紹介されています。

……私は府中市の芝間できわめて古い農家を見た。その家には縁がなく、また押入れもない。このような農家は農家としてももっとも古いもので、いわゆる下屋がついていない。家の中はキチンと整頓されていて少しも取り乱したところがないのはこの家の人たちの性格を物語るものであろうが、この几帳面なところが古い家をいままでもちこたえてきた力になっているのかもわからない。おそらく二〇〇年にもおよぶ歴史を持った家だろうと思った。家の中の改造もそれほどしていないので、何とか保存しておきたい家であると思う。……

この指摘は先の草葺民家調査集でもなされ、それが保存・復元につながったのでしょう。

当館には、この旧越智家を含め三棟の草葺の建物が移築復元されています。毎月第二土曜日に行われる「森のお話会」の際には、旧越智家住宅にあがることもできます。かつての府中の姿の一端を知るために一度覗いてみてください。

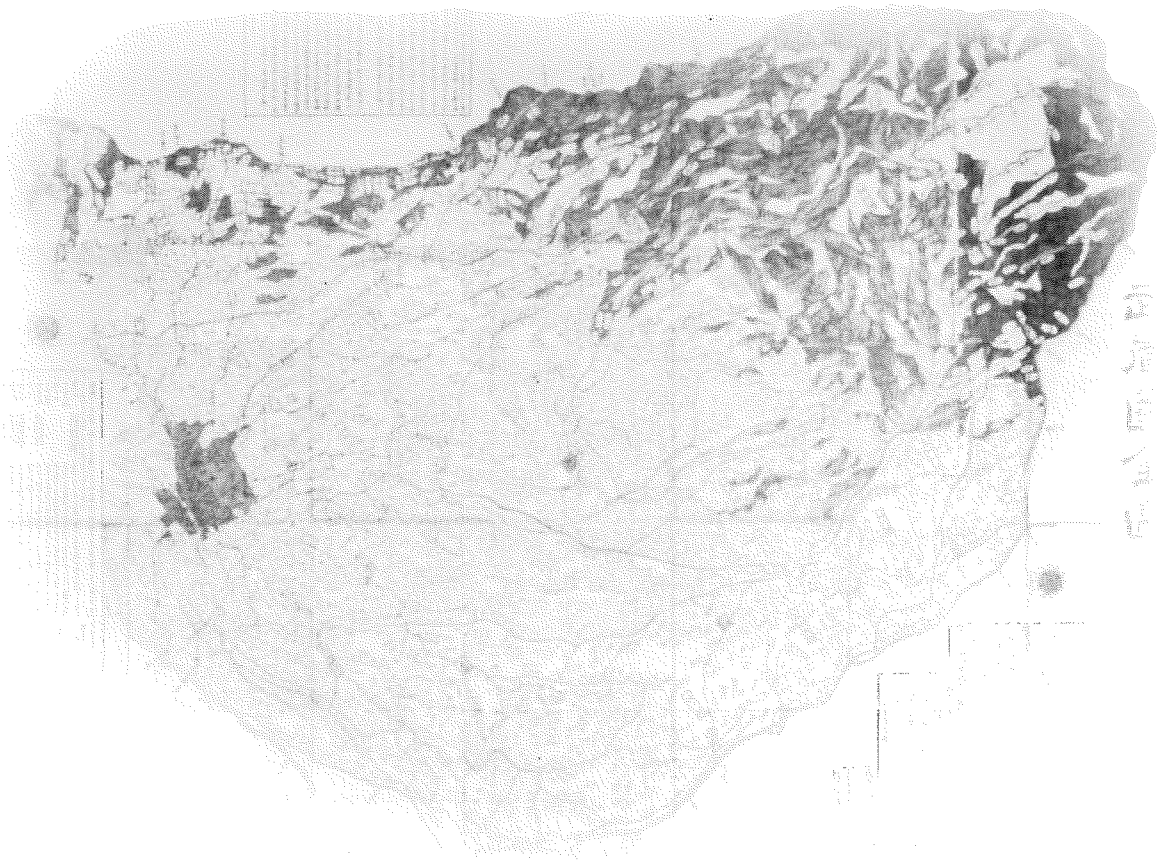
1968年（昭和43）頃撮影（写真No. 737-12a）
越智家住宅。現在は当館園内に移築復元されている

展示会案内

9.30(土)～11.26(日)

テーマ展

武蔵国(むさしのくに)―かたちと境界―



むかし府中は武蔵国の中心都市だったというのが、郷土の歴史における自慢話のひとつです。古代国家の成立とともに、日本列島が六〇数か国に分けられ、それぞれに国府が置かれました。国府の機能は中世まで続きましたが、以後、それぞれの国は行政的な実態を失いながらも、地域区分や地名として後の時代まで国名は使われて続けています。武蔵・武州・武蔵野・武蔵府中…、今日の私たちにとっても馴染みある言葉です。

武蔵国は、今の東京都と埼玉県のほとんど全部、それに横浜市と川崎市の大部分が範囲です。後に日本の首都となる江戸・東京を含み、横浜まで入る、結果的に2千数百万人、つまり全国の人口の五分の一を擁するメイン・エリアになってしまいました。幕末の安政3年（一八五六）に刊行された『武蔵国全図』（写真上）では、秩父・奥多摩の山地から武蔵野台地を経て江戸湾（東京湾）に至る起伏ある土地をベースに、巨大都市・江戸が根を張り、全国に向かう街道が、国内の町や村や新田村がぎっしり詰まる間を縫っていくような景観を俯瞰することができるでしょう。そのなかで、かつての武蔵国の首都・府中はすっかり埋もれてしまっているようですが…。

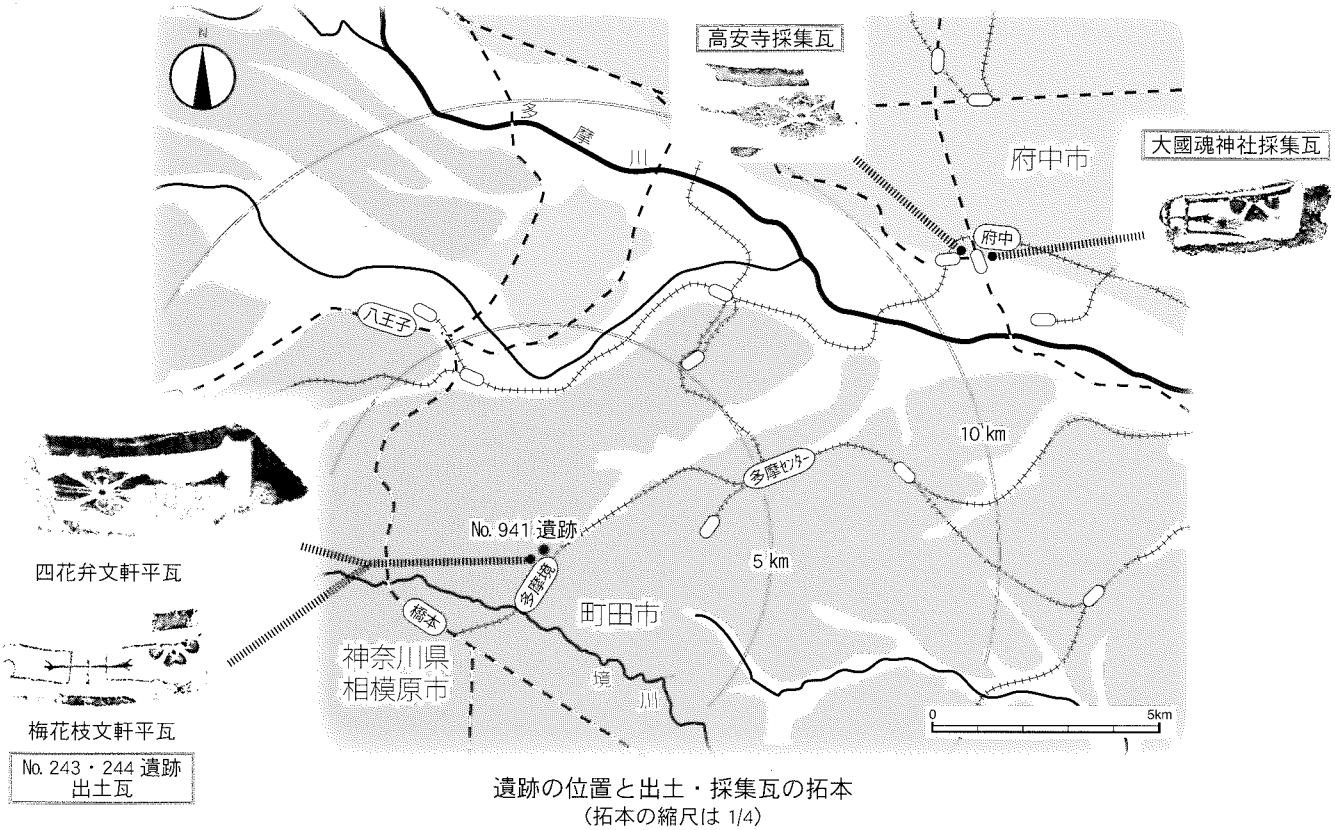
さて、こうした絵図を眺めていて気になるのは隣の国との境界です。東海道や甲州街道を歩いて行けばやがて相模国へ。多摩川の源流を訪ねれば甲斐国。北側、上野国との国境には川幅のある利根川が流れています。下総国との境は、『伊勢物語』の「東下り」の話だと隅田川ですが、この時代には江戸が膨張し、国境ラインももうひとつ先の江戸川に移っていたのです。そんな国境の風景は、本館二階・テーマ展会場で別の絵図で覗いてみることにしましょう。

（小野一之）

NOTE

江戸時代、町田から府中に運ばれた瓦

深澤靖幸



遺跡の位置と出土・採集瓦の拓本
（拓本の縮尺は 1/4）

1

昨年のことだったと思います。博物館に送付されてきた多摩ニュータウンの発掘調査報告書をめくっていると、見覚えのある瓦の文様が目に入りました。府中市の高安寺で見つかっている瓦に似ているのです。『東京都埋蔵文化財センター調査報告』155 集、多摩ニュータウン No. 243・244 遺跡の調査報告です。このよく似た瓦が、今回の話題です。

2

武蔵国分寺跡の発掘にも尽力された故宇野信四郎氏が蒐集した全国各地の古瓦を、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館が収蔵していて、そのなかに府中で採集された瓦が含まれていたため、調査させていただいたことがあります。もう、6 年も前のことです。

このとき見た、「府中高安寺」と採集地を示す書込みのある瓦が、多摩ニュータウンの遺跡から出土したものに似ているのです。軒先に用いる軒平瓦という種類の瓦で、ほかに例のない、四つの花弁を中心に据えた文様が特徴です。

ただ、この瓦、ひと目見て近世の瓦と判断できました。瓦の表面にキラコが見られたからです。キラコは、瓦の文様を写し取る型にまぶした雲母の粉で、粘土を型からはずれやすくするための工夫でした。近世瓦の特徴のひとつです。

6 年前の調査は、中世の瓦が対象でした。そのときは、近世瓦にそれほど関心を持っていなかったので、正直なところこの瓦について細かな調書は取っていません。

ただ漠然と、近世の瓦としては珍しい文様だと思い、以後、府中や周辺の遺跡から出土する近世の瓦にも、注意を払うよう心がけました。しかし、

遺跡から出土する軒平瓦は、高安寺採集品とは似ても似つかない、文様のものばかりでした。

多摩ニュータウンNo. 243・244遺跡は、町田市小山にあります。今の多摩境駅のすぐ近くです。発掘調査こそ行われていませんが至近のNo.941遺跡内に近世の瓦窯跡があるのだといいます。つまり、No. 243・244遺跡出土瓦は、No.941遺跡の瓦窯で生産されたものと考えられるのです。そして、No. 234・244遺跡で出土した瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・桟瓦などで、このうち桟瓦は一緒に出土した陶磁器類の特徴から18世紀前半頃に生産されたものと推測できる、と報告書は述べています。さらに、瓦窯そのものは17世紀後半頃には操業を開始していた可能性を指摘しています。

文様が極めてよく似ていることからすると、高安寺の瓦と小山の瓦は、同じ型を用いた可能性があります。そこで、高安寺採集瓦とNo. 243・244遺跡出土瓦の拓本を重ねて透かしてみると、ほぼ一致しました。これらの瓦は、同じ型を用いて文様を写し取ったと判断してよいでしょう。つまり、高安寺の瓦は、小山の瓦窯で17世紀後半～18世紀前半頃に焼かれたものである可能性が高いのです。

実は、これだけではありません。No. 243・244遺跡では四花弁を中心に据えたもののほか、梅の花と枝をモチーフとした軒平瓦も出土しています。これまた特異な文様なのですが、こちらは府中の大國魂神社付近で発見されていることが判りました。1927年発行の『東京府史蹟名勝天然紀念物調査報告書』5集に「府中京所」発見品として写真掲載された瓦がそれです。残念なことに、今、この現物の所在は不明ですが、全く同じ瓦の拓本が國學院大學所蔵の故柴田常恵氏のコレクションにあることも突きとめました。そして、こちらも拓本を透かしてみると、やはり一致しました。

ようするに、小山の窯で作られた瓦が、府中の大國魂神社（1871年以前は六所宮・六所明神といったので、以下、「六所宮」と記します）や高安寺に運ばれ、屋根に葺かれていたのです。

小山は境川に面した丘陵斜面です。府中へは多摩丘陵を越え、多摩川を渡らなければならなりません。直線距離にして12km。重い瓦を運ぶ労力はさぞかし大変だったことでしょう。

また、この瓦窯で生産された瓦の供給先が、府中の六所宮と高安寺以外に知られてないことを重視すれば、小山の瓦窯は六所宮や高安寺の需要に応じて営まれた可能性も浮かびます。

これまで、多摩地方の近世瓦に関する研究は全くの手付かずの状態でした。生産地と消費地が結びついた今回の発見は、これからの研究の指針になるはずです。

最後に、希望的な推測をしておきます。

No. 243・244遺跡から推測されたこれら瓦の年代は、17世紀後半～18世紀前半でした。この年代はもう少し絞り込めないでしょうか。

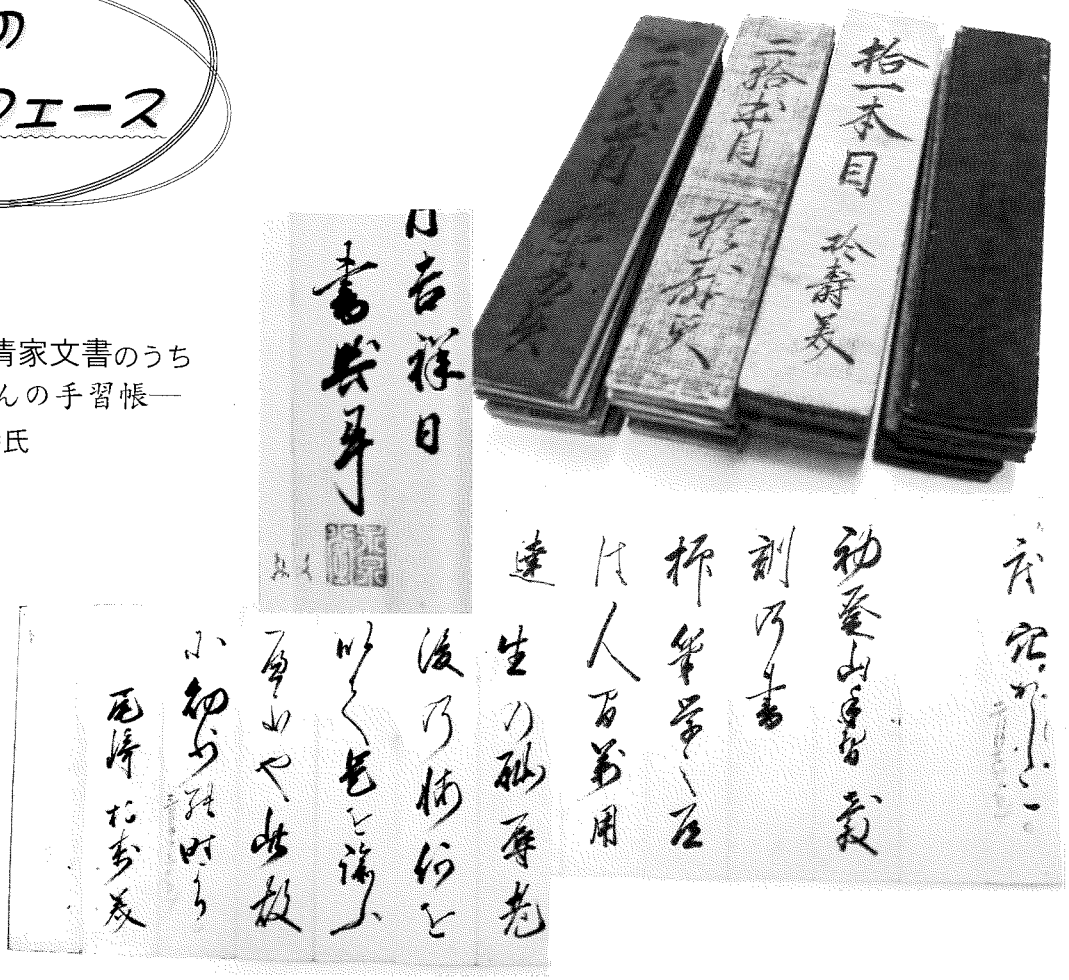
試みに、六所宮と高安寺における17世紀後半～18世紀前半の間の社殿や堂舎の建立記録をたどってみます。府中の宿場は1646年に大火に見舞われています。この時、六所宮も焼失しています。そして1667年、将軍徳川家綱の命により社殿が再建されています。以後、1726年、1737年、1782年にも部分的な修造の記録がありますが、1667年の社殿再建は大規模なものでした。瓦を用いたとすれば、この再建事業に関わる可能性が高いように思います。

一方、高安寺では、1634年頃本堂再建、1671年大殿建立、1697年山門建立、1720年頃観音堂建立、1771年新本堂建立といった記録があります。このうち、1671年に建立された大殿の性格は不明ですが、名称からすると本殿に準じた堂宇でしょうか。六所宮の再建年と近接している点でも注目できます。

つまり、1660年代の瓦と考えられないかというのが、ここでの推測です。もし、この時の瓦だとすれば、幕府が主導した六所宮造営の実態を解明する上で大変興味深い知見となります。

とはいえ、この年代は根拠があるものではありません。何しろ、出土資料は少なく、また近世の瓦に対する研究もほとんど進んでいないのですから。今後の研究の進展に期待したいところです。

収蔵庫のニューフェース



是政 大久保清家文書のうち
—すみちゃんの手習帳—
寄贈：高田保幸氏

「親戚の所で蔵を整理した時に、大事かと思ってとっておいた物だけど…」と、高田さんが寄贈してくださったのは、是政で水車経営などもしていた旧家、大久保家の資料でした。大方は幕末から明治にかけて発行された儒教や歴史関係の書籍ですが、3分の1位を占めていたのは、50冊以上の手習帳でした。

手習帳とは、明治初年に近代的な学校教育が始まるまで、寺子屋や私塾の先生が、子ども達一人ずつに書き与えた手習い（読み・書き）のお手本です。子ども達はこれによって、文字と同時に、地理や歴史、手紙の書き方等々社会生活の常識を学びました。形はパタパタと細長く折りたたんだ折本が多く見られます。

手習帳自体は、そう珍しい物ではありませんが、今回注目されるのは、ほとんどが使用者が分かる事です。その中でも、高木村（東大和市）の永泉堂と号する先生が「すみ」の為に書いたものが最も多く33冊もありました。しかも表紙に書かれている「〇〇本目」というのをたどってみると、1冊を除いて4～35本目まで連続しています。

中を開くと、10行位ごとに朱字で「〇月〇日下ゲ」と注記されています。1度通うとその分ずつ習ったのでしょう。この日付を整理してみると、文久2年(1862)閏8月～慶応2年(1866)12月の4年半に亘っています。文字は仮名交じり文から漢字が多くなり、序々にくずし方が大きくなる傾向ですが、内容は、いわゆる女子向けの事項ばかりでなく多岐にわたっており、当時「教養」とされた事柄が推測されます。

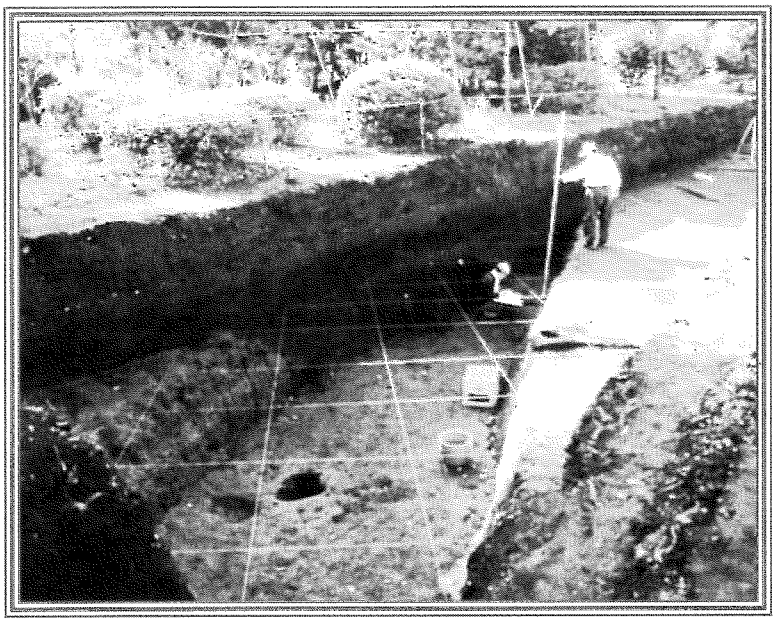
大久保家に確認すると、すみは嘉永5年(1852)生まれで、高木村の尾崎家から明治9年(1876)に当家に嫁した女性だと知れました。とするとこの手習帳で学んだのは10～14歳の時です。

おそらくは多摩の農村で一生を送った彼女が、どんな思いでこれらを嫁入り道具に加えたのか興味深いところです。

最近の発掘調査

中世武士の居館跡か？ 大規模な区画溝発見

西府町一丁目・本宿町一丁目　府中市教育委員会　西野善勝



大きな溝

またまた西府地域で大きな発見がありました。今度は、城郭の堀割を連想させる大規模な溝の発見です。

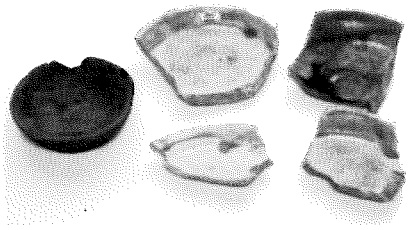
発見場所は、西府文化センターと、それに隣接する元西府苗圃の敷地周辺です。ここは多摩川の河岸段丘の縁に位置していて、南側は10 mほどの急峻な崖になっています。そのため眺望がよく、多摩川の対岸、遠くは富士山まで見渡すことができます。

発見された溝は、西府文化センターの西側の道路に沿って崖から北方向に長さ120 mにわたって確認され、東へ150 m離れた第五学童クラブの東側では、崖から北東に延びる約30 mの溝が発見されました。崖から100 m付近を通る南武線沿いでは東西方向に近い溝が確認されています。また、市指定史跡御嶽塚の東側や南武線北側でも南北方向の溝が確認されています。

溝の形状は発見場所により幾分異なりますが、側壁が直線的に傾斜し、底面がほぼ平らに掘られています。最大規模は深さ約2 m、底面の幅が約2.4 mにもなります。もし人が落ちたら這い上がることは困難だったと思われます。ここでは、溝の底に近い所から14世紀の中国の明銭や、16世紀のものと推定される陶器片やカワラケが出土していることから、この頃には埋まり始めていたようです。

断片的な溝をつなげると、ちょうど西府文化センターと西府苗圃の敷地を囲むように、崖から100 m程の範囲に網の目のような区画が現れます。このような溝は、中世武士の居館跡などで発見される溝と似ています。武士の「居館」は「館（タチあるいはヤカタ）」と呼ばれました。おもに要害の地に建てられ、方1～2町（約110 m～220 m）の屋敷地を堀や土塁などで囲んだもので、「堀の内」ともいいました。調査では、まだ居館の建物は発見されていませんが、ここに住んでいた人物はどんな人だったのでしょうか。

今回見つかった居館跡は、これまで全く知られていませんでしたが、府中市域の歴史を解明する貴重な発見といえるでしょう。



溝から出土した遺物
第五学童クラブ付近の溝から出土したカワラケ（左1点）と陶器の皿（右4点）。

リニューアルトピックス

―展示室再生―

さらに市民に愛される
郷土の森博物館をめざして

② フレキシブルな展示室

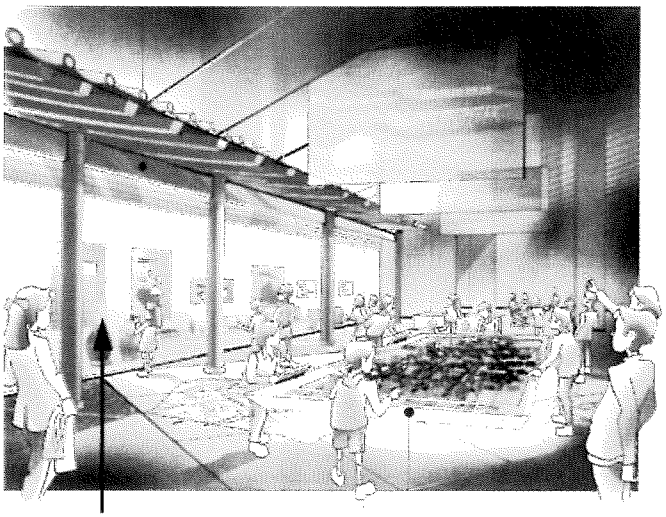
郷土の森博物館では、2007年度～2011年度の5年間で常設展示室をリニューアルしていくことになりました。前号では、昨年度末にできあがった基本設計図とともに、リニューアルが必要な理由と基本的な方針について、簡単に紹介しました。改めてその方針を要約すれば、《1.府中の歴史・民俗・自然が学べる場とする。2.ホンモノを重視する。3.参加体験型展示を設ける。4.あらゆる人が楽しめる場とする。5.フレキシブルな展示室を作る。》となります。

今回は、このうちの〈フレキシブルな展示室〉について、少し詳しく紹介しようと思います。

Flexibleとは柔軟性のある様子のこと。フレキシブルな展示室は、いま、博物館の展示を創るにあたって、重要な課題の一つでもあります。

各地の博物館の展示には大きく分けて2つの種類があります。一つは、特別展や企画展などと称する期間限定の展示会です。これに対して、恒常的な展示がふつう、常設展示などと呼ばれるものです。今回、郷土の森博物館がリニューアルするのもこの展示室です。

常設展示は博物館の顔とも言うべき展示です。しかし、常設展示という言葉からは、〈常にある〉→〈変わらない〉→〈いつ行っても同じ〉と連想されがちです。いつ行っても同じでは、2度、3度と訪れてくれる方が少なくなるのはあたり前です。もちろん、常設展示でも資料のコンディションを第一に考え、入れ替えをしているのですが、この違いに気付く来館者は僅かです。こうした反省から、最近では「常新展示室」という名の常設展示室を創った博物館もあります。



展示換えの容易な壁ケース。パネル類も架け替えのできる仕様に。

郷土の森博物館でも、今回のリニューアルでは、展示替えのし易い空間づくりを目指すことにしました。具体的には、①展示コーナーごとにフリースペースと名付けたケースを設置し、定期的に展示替えをしていく、②全体として、展示ケースや解説パネル類は展示替えを想定した仕様とする、といったところです。まだ、絵に描いた餅ですが、単にケース内の資料を入れ替えるだけではなく、〈常設展示室の中で、小さな展示会が常に開催されている〉そんな展示室を創りあげて行きたいと言うのが、郷土の森博物館の考えです。こうした展示室を創っていく中で、収蔵庫に眠っている多くの資料も陽の目を見る機会が増えるでしょうし、調査研究も一層進展していくはずです。さらには、常設展示そのものがボランティアをはじめとする市民の活動の舞台にもなって欲しいと思っています。

※あるむぜお　イタリア語で【博物館で】【博物館にて】の意

あるむぜお78

府中市郷土の森博物館だより　al museo NO. 78　2006年12月20日

1972年（昭和47）撮影　ハケの道（白糸台）。アスファルト舗装でない道が続く。（写真No. 978-15b）

目次

1-2 宮本常一の見た府中 その7
ハケの道を歩く

3 展示会案内 特別展
遺跡の世界 2006 ・ テーマ展
縄文から弥生へ

4-5 ノート　江戸のなごりか
府中宿番場矢島キン家住宅の調査

6 収蔵庫のニューフェース

7 最近の発掘調査
埴輪が出てきたよ！ 遺跡発掘体験教室

8 展示室リニューアルトピックス ③

今から十年あまり前には自動車の通れない道も多かったし、通らない道もあった。それがあっという間に自動車の通らぬ道はなくなってしまった。よくよく歩くことがきらいになったようである。それでもまだ、あまり自動車の通らない道がほんの少しはのこっている。大国魂神社の東鳥居から東へ、台地の上をゆく道などがそれである。

宮本常一ほか 「府中さんぽ」
（『あるくみるきく』No.87　1974年）より